2021 年度 若手・女性研究者奨励金 レポート

研究課題	**新型コロナウイルスの影響と仏教**
キーワード	①パンデミック、②仏教、③宗教学

研究者の所属・氏名等

フリガナ 氏　名	グラフ　ティム GRAF Tim
配付時の所属先・職位等 （令和３年４月１日現在）	南山宗教文化研究所 編集員・南山大学 人文学部 助教
現在の所属先・職位等 （令和４年７月１日現在）	南山宗教文化研究所 編集員・南山大学 人文学部 助教
プロフィール	ドイツ出身の宗教学者の視点をもって、日本の仏教について研究します。フィールドワークを通じて日常生活における宗教と社会問題について考察します。また、「物」を巡る信仰に関心を持って、日本のモノの文化に着目したドキュメンタリーを撮ります。

1. 研究の概要

本研究は、新型コロナウイルスの拡大が仏教寺院の実践にどのような影響を与えるか、仏教者がどういう対応をとるかについて明らかにしようとするものである。宗教学的な観点から、参与観察とインタビューを通して、現代日本の仏教について、伝統仏教の儀礼、葬式法要、祭りが、コロナウイルスの感染拡大とともに、いかに変遷していくかを明確にする。

2. 研究の動機、目的

本研究は現代日本の仏教寺院の実践と日常生活を中心に、宗教者がパンデミック時にどういう対応をとるかについて考察を行うことによって、地域性が色濃く反映される寺院における葬式法要、祈祷儀礼、寺院の運営と感染防災への諸変遷を明らかにし、パンデミック時の宗教施設の役割について考察する。具体的には次の4点を明らかにすることを目的としている。

（１） 新型コロナウイルスの拡大がもたらす寺院の場における仏教実践の諸変遷（イベントの中止、法要のオンライン化等）を明らかにする。
（２） （１）が防災にどのように影響を与えるかについて明らかにする。
（３） 複数の調査地で（１）および（２）を実施することでその物質文化（スピリチュアルケアと民間宗教等との関わりのある御札・御守り等）との関わりを明らかにする。
（４） （１）、（２）、（３）を明らかにすることで、現代日本社会における密閉・密集・密接となる宗教実践の諸相と問題点を考察する。

よって本研究ではソーシャル・ディスタンスという社会距離拡大戦略が宗教にどのような影響を与えるかについて、現代日本の仏教の防災・物質文化・地域性という観点から主に東北地方、東京と中部地方で参与観察を伴う文化人類学的なフィールドワークをしている。

3. 研究の結果

本研究で得られた成果については学術発表で積極的に公表し、学術論文も出版した。また、本研究の成果を広く伝えるため、動画編集の方法も利用し、ドキュメンタリーを公開した。本研究の重要な成果は寺院の場における仏教実践の諸変遷に関わっている。具体的には次の4点を明らかにした。

（１） ソーシャル・ディスタンスを保つために質素な葬式法要が増えた関係で、パンデミックの発生前に様々な寺院の大規模な葬祭の場で活躍した役僧が失業している。

（２） パンデミックの状況で、祈祷および現世利益信仰の希望の増加が目立っている。名古屋市の万松寺の場合、健康に関連した祈祷の需要が以前より 30〜40 パーセント上昇した。

（３） 仏教実践のオンライン化がいかに進んでいるかについて、インターネット調査と仏教者のオンライン会議への参加で聞き取り調査を行ったが、フィールド調査の結果と異なることがあった。リモート実践の言説のみに注目すると寺院現場の実情が伝わらないと明確にした。

（４） パンデミックが防災にどのような影響を与えるかについて明らかにするため、東北地方の寺院をはじめ、埼玉県の大恩寺に焦点を当てることにした。大恩寺を事例に、新型コロナウイルスの影響で国に帰れない在日ベトナム人の実情を調べることによって、社会貢献、防災とマイノリティーの関連性について明確にした。また、介護者の集いおよび介護者カフェとして利用される寺院に焦点を当てることによって、新型コロナウイルスの影響で中止されたケア活動の再開の問題を明確にした。

これまでの研究成果発表は以下の通りである。

（１） 学術論文： GRAF, Tim (2021): “Japanese Temple Buddhism during COVID-19.” *Bulletin of the Nanzan Institute for Religion and Culture* 45: 21–47. (https://nirc.nanzan-u.ac.jp/nfile/4862).

（２） ドキュメンタリー：コロナにおける祈りと瞑想（2021）(https://vimeo.com/598900412) 大恩寺の旧正月（2022） (https://youtu.be/9mcLWGVVCVI).

（３） 学会発表と依頼講義：「いまドキュメンタリーを撮るということ―寺院の COVID-19 対応から考える」、国際研究フォーラム「日本の宗教文化を撮る」国学院大学国際フォーラム（2021 年 12 月 11 日）; “Zum buddhistischen Umgang mit der Corona-Pandemie in Japan” 「仏教者がコロナにどう対応するか」（ドイツ語）（Deutsche Gesellschaft für Natur- und Völkerkunde Ostasiens (OAG)（2022 年 05 月 11 日）。

私のドキュメンタリー活動が、『中外日報』（2022年5月25日，p. 7）にも取り上げられた。

4. 研究者としてのこれからの展望

檀家の少ない僧侶、寺院を担当していない僧侶（いわゆる役僧）に焦点を当てることによって、今後も宗教師とマイノリティーの研究に注目する予定である。地域別の役僧の割合についてはこれまでの研究で分かったので、各地の役僧にフィールド調査を行う予定である。また、パンデミックという危機時における地域社会の宗教への社会的期待により当事者の立場に立って応答するという側面から考えれば、現世利益信仰と地域性の議論は欠かせない要素であると考えている。それは、寺社の御札と御守りの物質文化においても明確になる。今後の研究成果を論文執筆の上、学会発表で公開する予定である。（認定済み：Asian Studies Conference Japan（2022年7月）とAmerican Academy of Religion（2022年11月）。また、本研究の成果との関わりもあると思うが、日本学の講師としてイギリスのマンチェスター大学に呼ばれ、9月から日本の宗教、日本の仏教についての授業を担当することになった。

5. 支援者（寄付企業等や社会一般）等へのメッセージ

2021年度における新型コロナウイルスの影響と仏教について、フィールド調査に基づいた研究はあまりないので、かけがえのない研究だと言われることがあります。本研究の結果を高く評価する海外の研究者からのメッセージをこれまでいくつかもらいましたが、その感謝を支援者に伝えたいと思います。2021年度の若手研究者奨励金のおかげで重要な研究ができて良かったと思います。心から感謝申し上げます。